

---

# シュガーキューブ

きみよし藪太

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

シユガーキューブ

### 【Zコード】

Z0624M

### 【作者名】

きみよし敷太

### 【あらすじ】

髪を伸ばしている理由は、あなたの前の彼女が長い髪だったから。わたしづばかりがあなたを好きで嫌になる。  
嫌いじやないから一緒にいるつてなに?  
好きつて、口に出さないと結構伝わらないものなんだけどな。

本当は、声の高い男なんて嫌い。

女々しい感じがするじゃないの、気持ち悪い粘着質な声がわたしの鼓膜を搔さぶるのかと思うと吐き気すらしてくる。今までの人生の中で、会つてきた嫌いな人間達が揃いも揃つて甲高い声をしていたせいかもしない。

あなただけが、たつたひとり、世界の中でその例外。

「随分伸びたな」

髪、色抜きまくりだな、と笑いながら彼の指がわたしの頭に触れる。

透明にそして少し高い声。色抜きまくりだよ、とわざとぶつかりぼうに答えてみる。心臓のドキドキが響いてしまわないように、必要以上の大きな声で。

彼は知らない、わたしが髪を伸ばすその訳を。

わたしも言わない、言つのは悔しいからだ、まさか彼の昔五年も付き合つていた女の人が、ひどく長い髪をしていたからだなんて、それを真似してだなんて、絶対に。言わない。

「お前、色が白いんだから黒髪のが似合うのに」

「そんな事ないもん、茶色い方が可愛いもん」

「その顔じゃタカが知ってる『可愛い』だけどな」

力を込めない平手で彼の頬を叩く。彼の言葉の語尾がまだひらひらと空間に漂つていてるうちに。

「すぐに手を出すな、乱暴女」

「あなたの頬より今ので傷付けられたわたしの心のが痛いわ」

「お、なんか恰好良い事言つじやん」

「でしょ、今見てるドラマで主人公が言つてた……あ、ネタバラしちゃった」

彼の笑い声が響くのは、やはりその音程が高めのところで設定さ

れているからなのだろうか。声が似るのは骨格が同じだからと聞いた事があるけれど、声の高低はどうやって決められているのだろう。不思議。

「バカだな、」

でも髪は良い匂いだな、と彼がわたしの後ろ髪を束ねて掴み、自分の鼻へと近づける。もう付き合い始めて一年以上が経つのに、未だにそんな彼の行動に胸をときめかせてしまつ自分は、他人から言われるまでもなくバカだと思う。

「ちょっと、オヤジ入ってるよ、その行動」

だから言わない、彼が気に入っている香水がグリーンブーケの香りを基調としているから、シャンプーもわざわざ似た匂いのものを探し回つて使つているだなんて。

わたしは彼に言つていらない事が多すぎると思つ。恥かしくて言えていない事が多すぎる、とても、とても。携帯のストラップに紫色の鈴を付けているのはそれが彼の好きな色だからとか、スカートしか穿かなくなつたのは彼が女らしい恰好の人が好きだからなせいだと、彼がやつてているからという理由だけで興味のなかつたサッカーをテレビで見るようになつたとか、言わない。絶対に言わない、そんな、わたしが彼を好きだなんて、彼を好きで仕方がないなんて、悔しいから、絶対に、言つて、やらない。

わたしがかりが、好きだなんて。

そう思つてしまつるのは、どうして彼がわたしと一緒に居るのか、いまいちの確信と実感と理由が分からなかつたからだ。

一度聞いたら、嫌いじゃないから、と言われた。

だけれど、嫌いじゃないなんていう言葉が通用するほど、わたしはお子様で単純じやない。愛してると囁けとは言わない。言わないけれど、鈍感なわたしは態度で示されてもあまり気付かない。それに、感情を表にあまり出さない彼は、宇宙人ぐらゐ理解不可能な存在としてわたしの目に映る。

好きと言つて。

好きだと言つて、わたしにそれを分からせて。  
それは我僕かしら、ただの、我僕なかしら。

「宇宙人、好き？」

「は？」

「宇宙の人よ、地球人じやない人」

「そんなの考えた事もない、好きか嫌いか？　害がないならどうち  
でもない、ああ居るんだな、の認識だけ」

わたしの事もそうなのかな。

認識、あ、居るな、つて、思つだけなのかな。

「なに、ブス顔」

鼻を摘まれた。

可愛くない顔がますます可愛くない、だなんて。

言わないで、冗談でも傷付くから。

だつて、わたしの一番可愛い顔は、あなたにしか見せていいつ  
もりだから。

熱い紅茶をかけられて、とろとろに崩れてしまうシュガーキュー  
ブによく似た笑顔なんて。他の誰にも見せてないんだから、あな  
ただけなんだから。そういうのを分かってくれないなんて、ちよつ  
と、わたしよりも鈍感すぎるよ、それとも気付いてわざと知らん  
振りしてるんなら。

知つててわざと気付かない振りでて笑つているのなら。

「ブス顔の女と付き合つてるなんて、あんたの趣味も大概最悪なん  
じゃないの」

「いいの、俺はマニアなの」

「なんの」

「お前の」

「は、」

わたしマニアって、何。

「……わたしのマニアって、何さ」

「なんか知らないけど、心奪われてるつて事だよ

「……ふうん」

ふうん。

何、それ。

そんな事、唐突ににんまり笑いながら言つて、するによ、すぐ  
するい、わたし、ほら、もう、心臓が。

「わたしづつかがあんたの事好きなんだと思つ」

「お、自惚れてんな？」

「今のセリフのどこが自惚れになんのよ！」

髪を、右の指で絡めて彼はくるくるとする。わたしの、茶色い髪。  
頭を撫でられて幸せになるのは、安心している証拠。嫌いな奴だつ  
たら、わたしは牙をむき出して怒鳴る。触らないで、と。怒鳴れな  
いなら卑屈な愛想笑いをして逃げる、すみません髪触られるの苦手  
なんです。

髪に触れられるのが嫌いな女なんて、この世にひとりも存在しない  
のにね。

好きな人に髪を撫でられる事ぐらい、幸せでとろけてしまう事な  
んてないのにね。

「今度は何、」

「……何も言つてないわよ」

「もの欲しそうな顔してんじやん」

「わたしマニアだつたら、言わなくつたつて分かればいいじゃない

の」

うん。

彼がにっこり笑つた。

はつきり、うん、と言つて。

「知つてる、うん、俺お前が言わなくとも、その顔してる時だけは  
何を欲しがつてるのか、ちゃんと知つてる」

後頭部を支えられて、押されて、バランスを崩すざりざりで、唇  
が、触れた。

「知つてる、その顔はキスして欲しい時の顔だから」

唇を尖らせて。

つつくよう。元通り。

肌のすべてに、わたしのすべて。。

キス。

わたしは驚いて目を閉じて、でもそうすると彼の顔が見えなくて勿体無い気になってしまつのですぐに臉を押し上げる。あたたかで、少し乾いている、彼の唇。

するいよ、そんなの。

するいよ、どうしてこんな時ばかり。  
わたしの事、分かつちやうの。

「髪、伸びたな」

キスの合間でそんな事を平然と言わないで、わたしは胸が高鳴つていて呼吸もままならないのに。

「でも、お前は短いのも似合つもんな」

もしも俺の好みの為に伸ばしてくるんなら切つてもいいよ、なんて言つ。

「髪の短いお前も好きだもん」

「どっち、が、自惚れ、」

てるのよ、の語尾は言えないままだつた。

「絶対、わたし、ばつかが、あんたを、好き、」

「知つてて、ありがとう」

するいよ、するい、でも、だから好き。

男なんて本当にずるい生き物で、でもずるくない男なんて何の刺激もない訳であつて、そうするとただのそこらに生息している雑草と同じなだけであつて。

もう何度もしているはずなのに、どうしてこの人のキスはわたしをときめかせるのだろう。こんなにも、どうしようもなく。

「……お腹空いた」

「あつ、お前ムードぶち壊しな奴だな」

「空いたんだもん、仕方ないじゃん」

嘘、本当はあなたのキスだけでお腹いっぱい。でも、悔しいからそんな事は言わない。

あなたがわたしマニアなのに輪をかけて、わたしはあなたマニアだよ、と言いたかったけれど、人のセリフで会話をするのは趣味じゃないのでやめておく。子供の意地つ張りになってしまいそうだし。ただ、次のくちづけはわたしの方から、そっと。してみた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0624m/>

---

シュガーキューブ

2010年10月8日14時39分発行